

動物福祉を高める動物飼育の環境についての一考察 ～実態・知識調査から、小学校の動物飼育の改善と充実を目指して～

松本みゆき

(愛知教育大学大学院 教育学研究科)

A Study about Breeding Activities' Environment for the Cultivation of Animal Welfare

Miyuki MATSUMOTO

(Graduate Student, Aichi University of Education)

I 研究の目的

本研究の先行研究として述べた「動物飼育における低学年児童と動物の『出会わせ方』についての一考察」¹⁾において、動物福祉の必要性を明らかにした。中でも、「五つの解放」の概念は、動物にとっての快適な環境を示し、動物の飼育者にとって重要であることを述べた。しかし、概念を示すだけでは、学校の現場において普及していくことは難しいと考える。そのため、本研究では、現状調査から動物飼育の環境面での問題点を探り、動物福祉の概念を具体化することを目的とする。

II 五つの解放と動物飼育

動物を飼育する際には飼い主の責任として、「五つの解放」を満たした快適な生活環境と1年365日の十分な世話を動物に与えなければならないと考えられている²⁾。「五つの解放」は、もともと家畜福祉のために提唱されたものであるが、「現在ではペットをも対象とする動物福祉学にも敷衍されている」³⁾ことから、養老・的場による説明を加えたものを表1として示す。

表1 五つの解放 (five freedoms) ⁴⁾⁵⁾

1) 空腹および渇きからの解放

動物の70-90%は水分でできているが、高齢動物は水分の貯留が減少するので脱水症状を起こしやすく注意する必要がある。いつでも「新鮮な水が飲めるか」ということはとても重要なことである。そして、動物の種類や年齢、健康状態にあった食べ物を適切な与え方で給餌することも大切である。

2) 不快からの解放

日よけのない炎天下、風雨、騒音や振動にさらされ続けている、糞尿にまみれている等、人間でも不快と思うような飼育環境にしない。飼育環境は、動物が落ち着け、適温と清潔に保たれる場所であるということが大切。特に愛玩動物は、人間の生活に密着しているの、家庭環境が動物にストレスを与えないような配慮が必要。

3) 苦痛・傷害・疾病からの解放

病気やけがの場合には放置することなく、痛みの軽減も含めて、適切にケアする。

4) 恐怖および苦痛からの解放

動物の肉体的苦痛ばかりでなく精神的・心理的苦痛にも配慮し、不安や恐怖を取り除く。母子の早期隔離や群れ動物の単独飼育を避けるといったことも含まれる。

5) 正常な行動を発現する自由

種や個体によって、それぞれ必要な運動量が異なる。それぞれの動物種の習性になつた運動ができる空間を確保してやる。

動物飼育における動物福祉について考える際、学校で飼育されることの多いウサギについて述べていく。「五つの解放」を振り返ると、1)のように、水・食事の重要性はいうまでもない。2)の不快からの解放とは、動物が落ち着け、適温と清潔が大切とされることに加え、動物にストレスを与えないようにすることも大切であることがわかる。3)には、けがの予防も含まれると考えられる。獣医師との連携も含まれるが、ウサギ飼育では、オスの多頭飼いをしないこともけがの予防として考えられる。4)では、不安や恐怖を取り除くという側面で、動物への

近づき方、抱き方など、「接し方」が含まれると考える。また、ウサギはウサギのみの飼育小屋で飼う等の、同種の動物飼育を心がけることも含まれると考える。5) 運動については、ウサギでは走るような運動場を設けることが考えられる。また、歯の摩耗に役立つような、かじり木なども必要だろう。

これらの観点を児童にもわかるようにより簡易化し、学校での動物飼育に取り入れるため、五つの解放を「五つの必要なもの」とした。また、動物の生活の質のために問題としてあげられている3観点⁶⁾を踏まえ、表2としてまとめた。

表2 動物飼育における動物福祉

1) 飼育者の知識不足や過剰な愛情 (餌の与えすぎも含めて)がないこと 「五つの必要なもの」	
① 食事	水・食べ物
② 快適さ	適温・清潔
③ 健康	獣医師・オスの個別飼育 (ウサギ)
④ 安心	接し方・同種のみ飼育
⑤ 運動	運動場・かじり木など (ウサギ)
2) 遺棄、不用意な繁殖がないこと	
3) 動物虐待(ネグレクトも含めて)がないこと	

Ⅲ 動物飼育の現状調査

動物福祉の考えをもとに、本章では学校における動物飼育の現状について明らかにする。そして現状から、問題点や改善点を考察する。本調査は、平成21年卒業研究「小学校における動物飼育環境に関する調査研究」(愛知教育大学教育学部 初等教育教員養成課程 自然系理科教育領域 野田研究室4年中山由衣)と共同で調査したものを使用している。

1 動物飼育に関する実態・知識調査

- (1) 目的：生活科や動物飼育にかかわる教師の哺乳類・鳥類の飼育に対する意識や理解についての実態を把握することを目的とする。
- (2) 調査時期：平成21年5月～10月

(3) 調査対象：浜松市の生活科にかかわる小学校教師 90人
愛知県内の小学校教師 10人

(4) 調査方法：質問紙法、実際のアンケート用紙は資料1に載せる。

(5) 調査内容：哺乳類・鳥類の飼育に対する意識や理解について以下の2項目に分けて調査を行った。

《1》飼育の実態調査

- 1) 現在の動物の飼育状況について
- 2) 鳥類の飼育について

《2》動物の知識調査

- 3) ウサギの食事について
- 4) ウサギ・ニワトリの飼育に対する理解について

(6) 結果及び考察：以下に主な質問内容とそれに対する回答の傾向を分析したものを示す。

《1》飼育の実態調査

1) 現在の動物飼育状況について

1. 現在屋外で哺乳類・鳥類を飼っていますか。

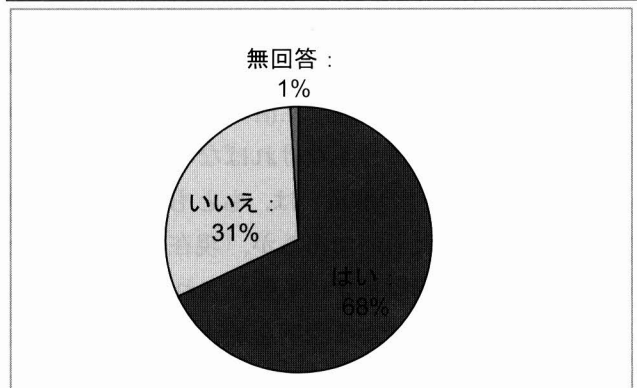


図1 屋外で哺乳類・鳥類を飼っているかどうか

図1より、現在屋外では68%の学校で哺乳類・鳥類を飼っていることがわかる。

(b) (現在屋外で哺乳類・鳥類を飼っている学校に対して) 休日の世話は誰がしていますか。(複数回答可)

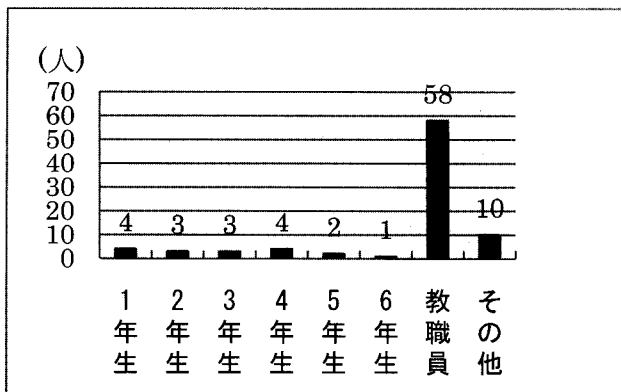


図2 屋外飼育における休日の世話の担当者

図2より休日の世話については、「教職員」が非常に多くなっており、児童は休日の世話にはほとんど参加していない。そのため、飼育担当の教師を中心に教職員の負担になっていると考えられる。また、「教職員」が多くなっているのは児童の安全の面から配慮されたことであると考えられる。

(c) (現在屋外で哺乳類・鳥類を飼っている学校に対して) 屋外で飼っている哺乳類・鳥類は何ですか。(複数回答可)

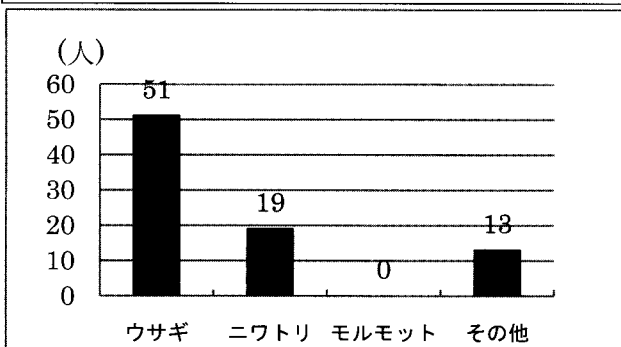


図3 屋外で飼っている哺乳類・鳥類の種類

図3より飼っている哺乳類・鳥類の種類としてはウサギが一番多くなっており、次いでニワトリが多くなっている。図1と図3より、動物飼育を行っている学校の75% (68校中51校) がウサギを飼育していることがわかる。

3. 生活科で扱っている動物を選んでください。(複数回答可)

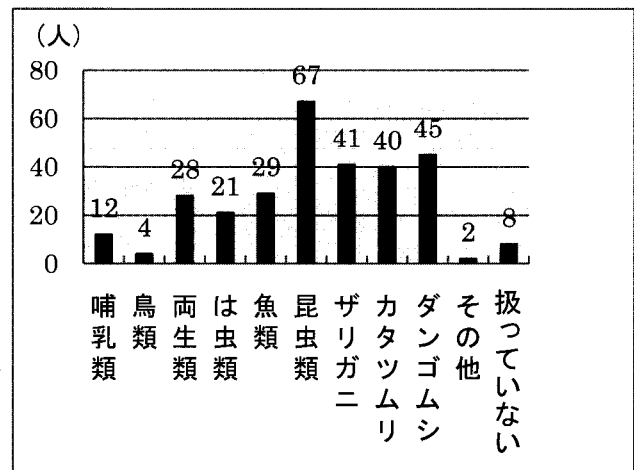


図4 生活科で扱っている動物

図4より、生活科における動物の扱いは、児童の日常生活の中でも自分で簡単に捕まえてくることのできる昆虫類が多く、世話が大変な哺乳類・鳥類はあまり扱われていない。これは低学年の児童が毎日継続しての飼育が難しいためであると考えられる。

2) 鳥類の飼育について

3. 今度飼う哺乳類・鳥類は何にしたいですか。又は、飼いたくないですか。(複数回答可)

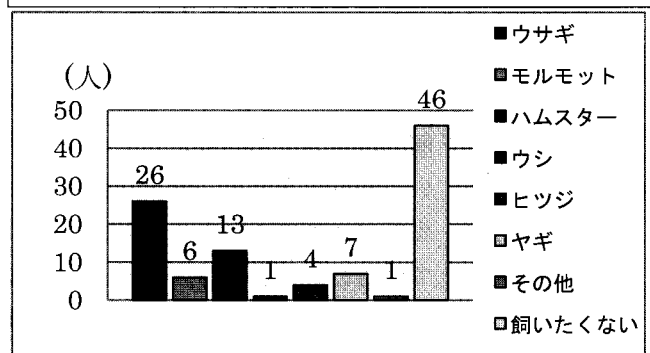


図5 今度飼いたい哺乳類・鳥類

図5より、哺乳類・鳥類で今度飼いたいと考えている動物はウサギが一番多くなっているが、半数がこれ以上哺乳類・鳥類は飼いたくないと考えている。この46人中、28人が現在屋外で哺乳類・鳥類を飼育している学校の教師(うち21人がウサギ飼育)であり、飼育をしている約6割の教師は今後哺乳類や鳥類を飼いたくないと考えていることが現状であることがわかる。また、この傾向がウサギ飼育に携わる教師に多いこともわかる。

※3. (今後哺乳類・鳥類を飼いたくないと考えている教師に対して) その理由を選んでください。(複数回答可)

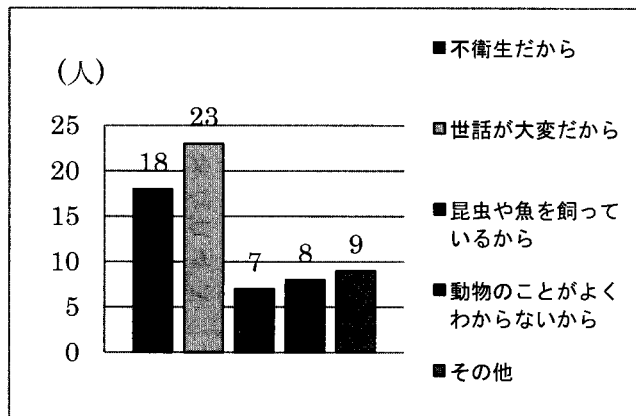


図6 哺乳類・鳥類を飼いたくない理由

図6より、飼いたくない理由としては「世が大変」「不衛生」という理由の順で多くなっている。内訳は、不衛生を理由にしている教師は、18人中12人が飼育を行っている。そのうちウサギ飼育が6人、ニワトリ飼育が4人であった。また、世が大変だという理由をあげた教師は23人中15人が飼育を行っている。そのうちウサギ飼育が10人、ニワトリ飼育は3人であった(一人は両方飼育していた)。さらに、不衛生という理由と世が大変という理由の両方をあげている教師は7人おり、ウサギ飼育は3人、ニワトリ飼育は2人であった。ここから、飼育活動を行っている教師にとって、飼育活動が不衛生であったり、世が大変であったりするため飼いたくないと考えていることがわかる。また、「動物のことがよくわからないから」を理由に挙げている教師8人のうち、5人が現在屋外で哺乳類・鳥類を飼育している学校の教師である。よって、動物についての知識が浅いまま飼育をしている場合もあると考えられる。

《2》動物の知識調査

哺乳類・鳥類の知識に関する調査を行った。

3) ウサギの食事について

4) ウサギ・ニワトリの飼育に対する理解について

①ウサギについて

②ニワトリについて

全体の結果を表3として示す。

表3 動物飼育に関する知識について

	配点(問題数)	平均点	正答率
3) ウサギの食事	20	10.1	50.5%
4) ①ウサギ	17	10.3	60.6%
②ニワトリ	13	6.3	48.5%
3), 4)の合計	50	26.7	53.4%

表3より、全体の傾向として、正答率は概ね5割であった。ここからは、3)及び4)①について考察していく。ニワトリについての調査項目は、飼育環境についてではなく、高病原性鳥インフルエンザについての知識を主に設問としたので、割愛する。結果のみ、資料1に合わせて載せる。

3) ウサギの食事についての調査結果

「ウサギに与えても良いと思うものには○、与えてはいけないと思うものには×をつけてください。わからないときには△をつけてください。」という質問をした。ウサギの食事についての結果を正答率として表4とする。便宜上与えても良いものと与えてはいけないものに項目を分け、与えても良いものは正答率の高い順に、与えてはいけないものは正答率の低い順に示した。

与えても良いものの正答率は、10項目中8項目が50%以上(下線)であった。特にラビットフードやニンジン、キャベツは95%以上の教師が正解している。また、オオバコ、タンポポ、ナズナなど、芝生や校庭に生えていることの多い植物についての正答率も高いものとなっている。一方、与えてはいけないものの正答率は、10項目中6項目が50%以下(点線)であった。これは平均正答率の差からも読み取れる。ウサギは草食動物であるため、パンや砂糖菓子、ウサギ用おやつ(クッキーやトースト風のものを)を多量に与えるとおなかをこわすことがある。また、炭水化物が多く含まれるような穀類、野菜類にも注意が必要である。パンは給食の残りなどでウサギに与えることの多い餌の一つかもしれないが、ウサギにとってはお腹を壊す原因にもなるので与えないように教師が留意する必要があると考える。特に、今回の結果から、与えてはいけないものについての知識が必要であると感ぜられる。

表4 ウサギの食事についての正解・正答率

与えても 良いもの	正答率 (%)	与えては いけないもの	正答率 (%)
ラビットフード	100	パン	12
ニンジン	99	豆類	13
キャベツ	97	生のイモ	24
レタス	77	モロヘイヤの 種	26
オオバコ	67	ピーマン	32
タンポポ	66	アボカド	36
ナズナ	62	ニラ	58
ハウレンソウ	58	ネギ	66
おから	29	タマネギ	73
しその葉(紫)	14	チョコレート	73
与えても 良いもの の平均正答率	66.9	与えては いけないもの の平均正答率	41.3

4) ウサギの飼育に対する理解についての調査結果

第II章では、飼育活動における動物福祉について述べた。そのうち、表2では、飼育者の知識不足がないこととして、「五つの必要なもの」をあげた。加えて、アンケート項目を上記の「五つの必要なもの」に基づき五観点に分けて表5に示した。なお、観点到てはまらないものは「その他」として分類した。正答率が50%以下のものは下線で示した。

①の食事(水・食事)についての設問は、4項目中、2項目が正答率50%を下回った。正答率77%の「ウサギに水を飲ませると病気になる(×)」は、以前はウサギは水を飲まないと思われていたことが多かったが、現在はウサギは多くの水が必要であることが認識されているといえる。「休日はエサをやれないので、金曜日にたくさん餌を与えておいた方が良い(×)」を誤答した教師は、休日に餌をやれない場合、せめて金曜日に多めに与える、という意味で正解としたのかもしれないが、休日にも餌を与えなければいけない。また、「一日に餌は一回与えるのが良い(×)」の項目と合わせると、多くの小学校で飼育されているウサギは、毎日一度の食事、休日は金曜日に与えられた食事のみという場合が多いことが懸念される。「ウサギは自分の糞を食べる(○)」という

表5 ウサギの飼育に対する理解の結果

「五つの必要なもの」の観点 及び調査項目	正誤	正答率 (%)
①食事(水・食べ物)		
ウサギに水を飲ませると病気になる。	×	77
休日はエサをやれないので、金曜日にたくさん餌を与えておいたほうが良い。	×	53
ウサギは自分の糞を食べる。	○	32
一日に餌は1回与えるのがよい。	×	16
②快適さ(適温・清潔)		
春の管理では、日当たりの良い場所で日光浴をさせるのも良いが、一部日陰を作っておくことも重要である。	○	93
ウサギは暑さに強い。	×	83
安心して子育てできないと、親ウサギは子ウサギを食べてしまうことがある。	○	78
③健康(獣医師・オスの個別飼育)		
1つの小屋に、オスは2匹以上いたほうが良い。	×	57
ウサギは1年で大人になる。	×	14
④安心(接し方・ウサギのみの飼育)		
新しいウサギを小屋に入れるときには、ケージに入れたままでなく、早く仲間に慣れさせるために、最初から小屋の中に入れるのが良い。	×	86
ウサギを抱くときは、まず耳をつかむのが良い。	×	78
夏季は、ウサギとふれあう時間を長くしたほうが良い。	×	76
1部屋に飼う動物は1種類であるほうが良い。	○	74
ウサギが人間が来ると逃げるのは、自分より大きく怖いからである。	○	58
⑤運動(運動場・かじり木など)		
ウサギの歯は生え替わる。	×	21
その他		
ウサギは口元に指を近づけると噛む。	○	58
ウサギが後ろ足をたたきつけているのは、喜んでいるときである。	×	51

ウサギの習性もあまり理解されていないようである。ウサギの糞には2種類あり、自分の肛門に口を近づけて食べる糞は、盲腸便といい、ウサギに必要なたんぱく質やビタミンB群を摂取している。肥満によって肛門に口が届かなければ、盲腸便を摂取できなく、栄養不足となるのである。ウサギを飼育しているならば、ウサギにとって重要な食事の一つとして認識したい。

②の快適さ(適温、清潔)についての設問は、三つの項目全てが70%以上の正答率であった。ウサギの小屋に日陰が必要であることを理解している教師が多いことがわかる。また、ウサギが暑さに弱いということも十分理解されているといえる。また、子育てのためにウサギが安心できるような環境を作ることが必要であることも理解されているといえる。

③の設問、健康(獣医師、オスの個別飼育)は、「一つの小屋にオスは2匹以上いたほうがいい(×)」の正答率は57%であり、ウサギは一匹の雄に対して複数の雌で生活し、オスが多いと争いがおこることが概ね理解されていると考えられる。しかし、「ウサギは一年で大人になる(×)」項目は、全項目中14%と最も正答率が低かった。ウサギは、雄は生後4~9ヵ月、雌は6~10ヵ月で繁殖可能になる。一匹のウサギで一回に4~10匹、一年に8回まで子どもを産むことができる⁷⁾ため、相当飼育環境に配慮しなくてはならない。これらの結果からは、オスは2匹以上同じ小屋にいない方が良いことは理解されているが、ウサギが約半年で大人になることが理解されていないため、ウサギが増え、けがをするという悪循環に陥っている可能性がある。そのため、本節図6でも示したように世話が大変と感じる教師が多いのではないかと考察する。

また、この健康の項目は獣医師との連携も含むと考える。本調査では、ウサギ飼育の知識を問うものであったので、獣医師と連携しているかについては問わなかったが、飼育動物が急に元気がなくなった、けがをしたりする場合に速やかに獣医師に診せられるような体制を整えておくことはやはり重要である。小学校学習指導要領解説生活編には「専門的な知識をもった地域の専門家や獣医師などの多くの支援者と連携して、よりよい体験を与える環境を整える必要がある」⁸⁾ことが明記されている。

④の安心(接し方、ウサギのみの飼育)についての項目は、5項目すべてで50%以上の正答率であった。ウサギが安心するような接し方は、心掛けられていると考えられる。

⑤の運動(運動場、かじり木など)については、該当する項目が「ウサギの歯は生え替わる(×)」のみであったが、正答率が21%と低い結果となった。ウサギの歯は一生伸び続けるため、噛み合う歯同士をすり減らすことで正常な長さが保たれる。この習性について理解されていないければ、歯をすり減らすためのかじり木や牧草の繊維質が与えられないことも考えられる。歯がすり減らなければ、歯が伸び、口の中を傷つけたり、食べることが難しくなったりするため、重要な知識といえるだろう。

IV 現状調査のまとめと改善点

1 調査からわかったこと

本研究では、動物福祉の観点で環境を改善・充実するために、先行研究を踏まえて理論研究や現状調査などを行った。理論研究では、動物福祉の考えから、動物の生活の質を高める必要があることがわかった。そのためには飼育者の知識が重要であり、「五つの必要なもの」としてまとめることができた。実態調査の結果は、現在屋外で哺乳類・鳥類を飼育している学校が7割と多かったものの、生活科ではなく飼育委員会での活動が多いこと、休日の世話の担当者は教職員が多く、負担になっていることがわかった。また、今後動物を飼育したいと考えている教師は少なく、不衛生や世話の大変さが理由として多くあげられた。知識調査と関連させて考察すると、不衛生や世話が大変と感じている教師ほど、知識不足にある傾向があった。また、動物を飼育していても、「動物のことがよくわからない」と感じている教師もおり、教師が理解しやすい動物飼育についての資料が必要ではないかと考える。

ウサギの食事についての知識調査では、ウサギにとっておなかを壊す原因となる「パン」を、与えても良いと考える教師が多く、啓発が必要であると考えられる。また、ウサギの飼育に対する理解についての調査では、「五つの必要なもの」の観点から考察した。②快適さや④安心の項目については理解が高かったものの、①食事の項目では、餌の回数について、③

健康の項目では、ウサギが半年で大人になることについて、⑤運動の項目では、ウサギの歯が伸び続けることの理解が不十分であることがわかった。

本稿では、紙面の都合上、掲載ができなかったが、本実態・知識調査と並行して、ウサギを飼育している小学校 10 校に協力を得て、インタビュー調査及び現地調査も行った⁹⁾。その際、特に個体数が多い学校ではウサギに名前が付いていない現状があった。また、一匹のみの飼育でも、名前のない場合もあり、ただ飼育しているだけの状態になっていないかが懸念される。伊藤裕康は、学級で動物を飼うことになったとして、児童がまず話題にするのは、動物の名前であるとし、「命名して、その名前を呼ぶ度に、その動物への愛着は増していく」¹⁰⁾と述べている。例えば、名古屋市立 I 小学校は、飼育しているウサギについて、「ミルキーの説明 ミルキーはタンポポと違い鼻が黒い 耳がギザギザ タンポポより鼻のまわりが黒い」という児童による説明書きを飼育小屋に掲示していた。また、ウサギを6匹飼育している愛知県みよし市立 C 小学校では、各ウサギの写真も

合わせて掲示していた。動物飼育の中で、児童が名前をつけ、呼ぶことによって愛着を増し、結果的に継続的飼育のための手段となると考えられる。

2 改善のための指標

調査結果から、動物の習性について理解されていないために管理が困難な場合が多いことがわかった。また、「五つの必要なもの」の理解に差が大きく、全ての必要なものが均一に動物に与えられているとは考えにくい。よって、飼育環境の改善のため、教職員が管理しやすい飼育環境をまとめて示すことが必要なのではないかと考えた。また、動物の習性を合わせた管理の要点を示すことで、より動物にとっても、飼育者にとっても良い動物飼育になると考える。なお、飼育小屋全体の改善については、改修が必要な場合も多く、予算の関係で困難であると考えられるので、日常の管理という面から改善点をあげる。この指標を図7とする。

まず、「五つの必要なもの」とそれに関わるウサギの習性について知ることが必要である。

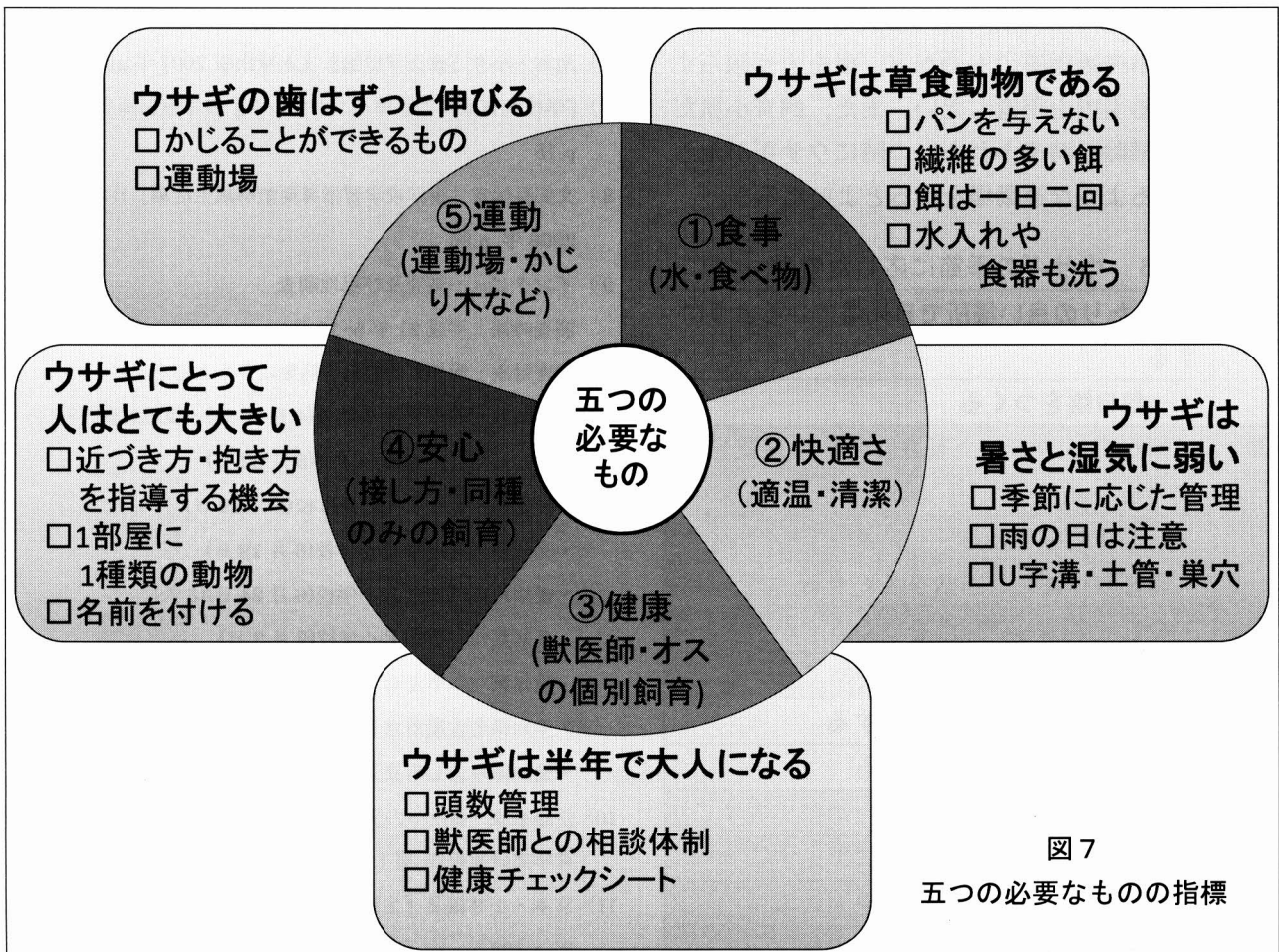


図7
五つの必要なものの指標

①食事については、「ウサギは草食動物である」という習性を踏まえ、パンを与えないこと、繊維の多い餌を与えることが要点である。また、餌は一日二回、水入れや食器入れも丁寧に洗うことを心がけたい。②快適さについては、清掃はもちろんのこと、「ウサギは暑さと湿気に弱い」という習性を踏まえ、季節に応じた管理に気を配りたい。この季節に応じた管理は、表6として示した。また、雨の後の管理や隠れ場としてのU字溝、土管、巣箱を用意したい。③健康については、「ウサギは半年で大人になる」という習性を踏まえ、頭数管理を第一に考えたい。ここでは、獣医師との相談体制が必要である。また、病気の予防のためにも、健康を記録するシートを準備したい。④安心については、「ウサギにとって人人はとても大きい」ことを踏まえ、近づき方、抱き方について児童に指導する機会を設けたい。また、動物に関する情報をこまめに得るよう心がけたい。動物が安心して生活できるよう、一部屋に一種類の動物を飼うことや、動物との心理的な距離を縮めるためにも、動物に名前を付けて世話をしたい。⑤運動については、「ウサギの歯はずっと伸びる」という性質を知り、木や繊維質のものなど、歯をすり減らすことのできるものを用意したい。また、飼育小屋だけでなく、掃除の時やふれあいの時にウサギが走ることのできるような運動場を作るとよいだろう。

表6 ウサギの季節に応じた管理

春	・日当たりの良い場所で日光浴できるようにする
	・一部日陰をつくる
夏	～餌が腐りやすく、暑さに苦手な性質をふまえる
	・新鮮な餌を与える
	・餌を取り替える回数を多くする
	・少しでも涼しい環境をつくる
	・すだれなどで直接の日光を防ぐ
秋	～夏に低下した体力を回復する
	・栄養のある餌を十分与える
冬	～寒さには強いが、保温のために工夫する
	・北風が入り込まないように工夫する
	・わらや乾草、すのこなどを入れる
	・暖かい日は日光浴させる

改善の指標として、図7、表6をあげた。「五つの必要なもの」があり、見通しのある世話ができ、衛生的な動物飼育になることを願う。また、「子どもにとっても、動物にとっても飼育コーナーは快適な空人」¹¹⁾であるべきだし、教師にとっても快適な空人であることが、環境において動物福祉が高まった姿と考える。

【引用・参考文献】

- 1) 松本みゆき「動物飼育における低学年児童と動物の「出会わせ方」についての一考察」愛知教育大学生活科教育講座紀要『生活科・総合的学習研究』第7号 2009年 pp.115-122
- 2) 山口千津子「子どもと動物 英国における動物愛護教育」文英堂出版『JVM』第59巻第2号 2006年 p.112
- 3) 武内ゆかり「破綻する生活・ペットの問題行動と飼い主」森・奥野編著『ひとと動物の関係学第3巻 ペットと社会』岩波書店 2008年 p.174
- 4) ヤスミン・デブー「効果的な動物福祉教育は子どもの心と考え方を変える」『人と動物の関係学会誌』2006年 p.23
- 5) 養老孟司・的場美芳子「動物は自然・ペットからコンパニオン・アニマルへ」森・奥野編著『ひとと動物の関係学第3巻 ペットと社会』岩波書店 2008年 pp.126-127
- 6) 池本・小方『獣医学概論』文永堂出版 2007年 pp. 121-122
- 7) 『学校飼育動物の診療ハンドブック』日本獣医師会 2000年 p.15
- 8) 文部科学省「小学校学習指導要領解説生活編」日本文教出版 2008年 p.36
- 9) インタビュー調査及び現地調査
調査時期：平成21年5～10月
調査対象：愛知県内の飼育活動にかかわる教師(10人)
・愛知県刈谷市立A小学校(4月16日)：現地調査のみ
・愛知県刈谷市立B小学校(5月22日)
・愛知県みよし市立C小学校(5月29日)
・愛知県刈谷市立D小学校(6月19日)
・愛知県安城市立E小学校(6月24日)(3人)
・愛知県刈谷市立F小学校(7月2日)
・愛知県刈谷市立G小学校(9月7日)
・愛知県名古屋市立H小学校(10月21日)
・愛知県みよし市立I小学校(10月27日)
- 10) 伊藤裕康「場所への愛着をはかる生活科の授業」香川大学教育学部研究報告 第I部 117 p.7
- 11) 宮本・小林編著『生活科の学習環境づくり』東京書籍 1991年 p.102

<資料1>アンケート調査用紙 「動物飼育に関する意識調査」

《1》飼育の実態調査

1) 現在の動物の飼育状況についておたずねします。あてはまるものに○をつけてください。

1	現在屋外で哺乳類・鳥類を飼っていますか。	はい・いいえ
※1で「はい」を選んだ方は、次の(a)～(c)に解答してください。(複数回答可)		
	(a) その世話は何年生がしていますか。	1年生・2年生・3年生・4年生・5年生・6年生
	(b) 休日の世話は誰がしていますか。	1年生・2年生・3年生・4年生・5年生・6年生 教職員・その他()
	(c) 屋外で飼っている哺乳類・鳥類は何ですか。	ウサギ・ニワトリ・モルモット・その他()
2	現在屋内で哺乳類・鳥類を飼っていますか。	はい・いいえ
※2で「はい」を選んだ方は、次の(d)～(g)に解答してください。(複数回答可)		
	(d) どこで飼っていますか。	教室・空き教室・その他()
	(e) その世話は何年生がしていますか。	1年生・2年生・3年生・4年生・5年生・6年生
	(f) 休日の世話は誰がしていますか。	1年生・2年生・3年生・4年生・5年生・6年生 教職員・その他()
	(g) 屋内で飼っている哺乳類・鳥類は何ですか。	ウサギ・ハムスター・モルモット・その他()
※1, 2で「いいえ」を選んだ方は、次の(h)～(i)に解答してください。		
	(h) 哺乳類・鳥類を飼育したいですか。	はい・いいえ
	(i) 今後、哺乳類・鳥類を飼う予定はありますか。	はい・いいえ
3	生活科で扱っている動物を選んでください。 (複数回答可)	哺乳類・鳥類・両生類・は虫類・魚類・昆虫類 ザリガニ・カタツムリ・ダンゴムシ その他() 扱っていない

2) 鳥類の飼育についておたずねします。あてはまるものに○をつけてください。

現在、鳥を飼育している場合は3, 4の質問にお答えください。

1	鳥を飼いたいと思いますか。	はい・いいえ
※1で「いいえ」の方はその理由を選んでください。(複数回答可)		世話が大変だから・子どもが飼いたいと言わないから 鳥インフルエンザが心配だから・鳥のことを知らないから その他()
2	以前、鳥を飼っていましたか。	はい・いいえ
※2で「はい」の方は、飼育をやめた理由を選んでください。(複数回答可)		死んでしまったから・他の動物を飼っているから 鳥小屋が壊れたから・その他()
3	今度飼う哺乳類・鳥類は何にしたいですか。又は、飼いたくないですか。 (複数回答可)	飼いたい哺乳類・鳥類 {ウサギ・モルモット・ハムスター・ウシ・ヒツジ・ヤギ・その他()} 飼いたくない
※3で「飼いたくない」の方はその理由を選んでください。(複数回答可)		不衛生だから・世話が大変だから・昆虫や魚を飼っているから 動物のことがよくわからないから・その他()
4	鳥を飼うことに抵抗はありますか。	はい・いいえ

《2》動物の知識調査 (解答及び正答率)

3) ウサギに与えても良いと思うものには○, 与えてはいけないと思うものには×をつけてください。
わからないときには△をつけてください。

ラビットフード	○	100	ニラ	×	58	パン	×	12	キャベツ	○	97
ニンジン	○	99	ネギ	×	66	タマネギ	×	73	レタス	○	77
モロヘイヤの種	×	26	おから	○	29	生のイモ	×	24	チョコレート	×	73
ナズナ	○	62	ピーマン	×	32	タンポポ	○	66	ハウレンソウ	○	58
豆類	×	13	オオバコ	○	67	しその葉(紫)	○	14	アボカド	×	36

4) 以下の質問に, 正しいと思うものに○, 間違っていると思うものに×をつけてください。
わからないときには△をつけてください。

①ウサギについて

1	1つの小屋に, オスは2匹以上いたほうが良い。	×	57
2	1日に餌は1回与えるのがよい。	×	16
3	1部屋に飼う動物は1種類であるほうが良い。	○	74
4	ウサギは暑さに強い。	×	83
5	春の管理では, 日当たりの良い場所で日光浴をさせるのも良いが, 一部日陰を作っておくことも重要である。	○	93
6	ウサギの歯は生え替わる。	×	21
7	ウサギが後ろ足をたたきつけているのは, 喜んでいるときである。	×	51
8	安心して子育てできないと, 親ウサギは子ウサギを食べてしまうことがある。	○	78
9	ウサギが人間が来ると逃げるのは, 自分より大きく怖いからである。	○	58
10	ウサギを抱くときは, まず耳をつかむのが良い。	×	78
11	新しいウサギを小屋に入れるときには, ケージに入れたままでなく, 早く仲間に慣れさせるために, 最初から小屋の中に入れるのが良い。	×	86
12	ウサギは口元に指を近づけると噛む。	○	58
13	夏季は, ウサギとふれあう時間を長くしたほうが良い。	×	76
14	休日はエサをやれないので, 金曜日にたくさん餌を与えておいたほうが良い。	×	53
15	ウサギは1年で大人になる。	×	14
16	ウサギは自分の糞を食べる。	○	32
17	ウサギに水を飲ませると病気になる。	×	77

②ニワトリについて

1	鳥インフルエンザにかかるとニワトリは死んでしまう。	×	25
2	学校で飼っているチャボは, 主に春と秋に卵を産み, 夏と冬はそれほど生まない。	○	16
3	「高病原性」鳥インフルエンザに感染したニワトリの糞などが, 人間の体内に入ると, 人は鳥インフルエンザに感染する。	○	42
4	ニワトリ小屋の糞の掃除するときは, マスクや手袋を着用したり, 乾燥した糞が舞うことを防ぐために水をまいてから掃除することが大切である。	○	65
5	店では, 鳥インフルエンザに感染したニワトリの肉や卵が売っている。	×	83
6	高病原性鳥インフルエンザと, 冬に流行するインフルエンザは全く同じものである。	×	76
7	野鳥やネズミは, ニワトリにうつす病気を持っている。	○	59
8	ニワトリの体温は40℃で, 病気になると体温が下がる。	○	13
9	ニワトリなどの鳥は赤い点を突つくくせがある。	×	18
10	ニワトリは自分より順位の低いニワトリを突くが, 親子では順位争いをしない。	×	31
11	ニワトリを抱くときはまず羽をつかんでぶら下げる。	×	67
12	健康状態は, 特に糞の様子を観察すると良い。	○	63
13	チャボはニワトリの別名である。	×	85